

| | |
|------------------|---|
| Title | Expressed Emotion and Social Functioning in Chronic Schizophrenia |
| Sub Title | 慢性統合失調症における感情表出と社会機能 |
| Author | 三浦, 勇太(Miura, Yuta) |
| Publisher | 慶應医学会 |
| Publication year | 2005 |
| Jtitle | 慶應医学 (Journal of the Keio Medical Society). Vol.82, No.4 (2005. 12) ,p.27- |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 号外 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069296-20051202-0027 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Expressed Emotion and Social Functioning in Chronic Schizophrenia

(慢性統合失調症における感情表出と社会機能)

三 浦 勇 太

内容の要旨

家族の感情表出 (Expressed Emotion ; 以下EE) は患者に対する家族の全般的な態度を反映する臨床的尺度とされ、高EEは患者の統合失調症の再発予測因子になるとされている。EEの高低の成因を解明するためには、患者本人の要因や家族員の要因、さらに文化・社会背景のような外部要因を含め、多岐にわたる観点からの検討を要する。本研究では、統合失調症患者の社会復帰に関連し注目を集めている社会機能に着目し、EEの形成にいかなる影響を与えているかについて検討した。

対象はICD-10における統合失調症の基準を満たし、過去3ヶ月以上同居家族がある44名と、その全家族員82名である。家族は個別に、日本語版Social Functioning Scale (SFS) を記入した後、EE評価用面接であるFive-Minutes Speech Sample (FMSS) を実施された。また患者の精神症状と全般的機能の評価するために、日本語版Positive and Negative Syndrome Scale (PANSS) とGlobal Assessment of Functioning Scale (GAF) による評価を実施し、EEの高低と、精神症状、社会機能、その他の要因との関連を検討した。

その結果、52.3%にあたる23名の患者が高EE家族員と同居し、21名が低EE家族員とのみ同居していた。高EE群と低EE群では、患者の性別、年齢、罹病期間、抗精神病薬処方量、診断の下位類型、PANSSの下位項目、GAFスコアにおいて有意差はなかった。高EE群と低EE群間では、点数が高いほど社会機能がより高いことを示すSFSの2つの下位項目 (社会的引きこもり、自立レベル (能力)) と合計点のそれぞれにおいて、低EE群の方が有意に高い点数を示した。高EE群における低EE家族員と低EE群の家族員との比較では、社会的引きこもり、対人機能、自立レベル (能力) 項目において、低EE群の方が有意に高かった。得られた結果の因子分析では4つの因子が導かれ、第2因子がEEとSFS合計点によって説明され、高EEがSFSスコア低値と関連していた。さらにこの研究では高EE家族における低EE家族員の行動が高EE家族員のそれに類似していることが見出された。従ってより効果的なりハビリテーションのためには高EE家族における低EE家族員も統合失調症の慢性期における家族心理教育や対処行動トレーニングに組み入れられる必要があることを示唆するものである。

以上本研究により、統合失調症患者の家族のEEと患者の社会機能水準には双方向性に因果関係を持つことが明らかになった。また慢性統合失調症患者の家族員はおそらく患者の日常の社会機能を注視しており、患者の社会機能のレベルは家族のEEプロフィールに影響していることが示唆された。

論文審査の要旨

本研究は統合失調症患者の社会機能に着目しEEとの関連を検討したものである。対象は同居家族がある44名と、全家族82名であった。SFSが家族により評価され、FMSSおよびPANSSとGAFも実施された。23名 (52.3%) の患者が高EE 家族と、21名が低EE家族とのみ同居していた。高EE群と低EE群間では、SFSの下位項目 (社会的引きこもり、自立レベル (能力)) と合計点において、低EE群の方が有意に高い点数を示した。高EE群における低EE家族と低EE群の家族との比較では、社会的引きこもり、対人機能、自立レベル (能力) 項目において、低EE群の方が有意に高かった。因子分析では4つの因子が導かれ、高EEがSFSスコア低値と関連していた。また高EE家族における低EE家族員の行動は、高EE家族のそれに類似していた。

審査ではまず、境界線級の低EEを高EEとした理由について質問がなされた。先行研究では境界線級の低EEを高EEとした場合、より予後の予測性が高まることが指摘されており、本研究もそれに従ったとの回答がなされた。また、今回の対象は比較的に慢性軽症例であった可能性もあるが、この場合にもEEが再発可能性に影響を与えるのかとの質問があり、これに対し慢性例においてもEEの再発影響性が認められていると回答された。続いて高EEと低EEを形成する要因についての質問がなされた。病前からの家族側の要因についての検討は十分にはなされていないと回答があり、それに対し、家族の相互関係性や役割の違いも含めた検討を今後行うべきとの指摘があった。また論文中の対象採用基準によれば、慢性例のみならず急性例も含まれるため、その場合、高EEになることも考えられ、対象の設定に考慮するべきとの指摘があった。この点については、検討に含まれた初発2例とも罹病期間が1年以上の慢性状態にあったと回答された。今回の結果ではEEと社会機能の関連が確認されたが、同じ集団であっても違う時期においては結果に相違がみられることもあるかとの質問がなされた。例えば急性期においては幻覚妄想などの目立つ精神症状に対して家族の批判が強まることは予想され、また病期によって家族の注意の対象が変わることも考えられることから、同一集団であっても結果に相違がみられる可能性が高いとの説明がなされた。今後の課題として、高EE家族内における低EE家族員に焦点をあてる研究においては、同居家族が1名の場合にはこれを検討対象から除外するべきこと、評価方法としてのSFSの内部構造について一層の検討が必要であることが指摘された。

以上、本研究は今後さらに検討すべき課題を残してはいるが、統合失調症の慢性期におけるEEと社会機能の関連を確認し、さらには高EE家族員と同居する低EE家族員への臨床的介入の必要性を明らかにした点で、臨床的に価値ある研究と評価された。

論文審査担当者 主査 精神神経科学 鹿島 晴雄

内科学 鈴木 則宏 衛生学公衆衛生学 大前 和幸
医療政策・管理学 池上 直己

学力確認担当者: 北島 政樹、鈴木 則宏

審査委員長: 鈴木 則宏

試問日: 平成17年 7月 5日